グループホームこまくさ野村宮の前・南棟

（別紙の２）

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、（Altキー）＋（Enterキー）です。〕

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	（1）	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	住み慣れた地域でその人らしく生活が送れる様にホームと地域の関係性を大切にしている。月に一度のフロア会議やミーティングの際に理念に基づいたケアが行えているか話し合っている。職員研修でも理念について学ぶ機会を設けている。	法人の理念「その人らしく生き生きと」を額に入れ、リビングの誰にでも見やすい場所に掲示している。フロア会議やミーティング時に職員間で話し合い、利用者の役割や活躍の場があり生き生きと生活できているか振り返りをし、理念に基づいたケアに繋げるようにしている。会議では理事長よりアドバイスがあり、理念にそぐわない言動があれば職員間で声をかけ合い、管理者からも注意を喚起している。	
2	（2）	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	散歩の時など地域の方々と顔を合わせ挨拶を交わしたりしている。千羽鶴を市役所へ届けたり、雑巾寄贈に近隣の小中学校、保育園、幼稚園を訪問しており、コロナ禍でも玄関先で渡すなど交流の機会を継続している。小学校で育てたさつまいもやスイカを届けて頂いたり、ビデオレターを届けて下さったりした。お礼に色紙を渡すなど交流している。常会に参加し三九郎、夏祭り、文化祭など地域の行事にも参加しているが、今年は行事が全て中止となり参加できなかった。障害者就労支援事業所の方が週一度清掃に来てくれている。	地元自治会に加入し地域の行事に参加していたが新型コロナ感染拡大の影響を受け活動が制約を受けている。そのような中でも市役所に千羽鶴を届けたり、利用者手作りの雑巾を地域の幼稚園・保育園・小学校・中学校へ出向き玄関先で贈呈している。また、実習生の受け入れもしており、感染対策をしながら可能なものについては例年通り活動している。日常的な散歩や買い物の際には地域の方々と挨拶を交わし、野菜や果物の差し入れも継続して頂いている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	中学生の職場体験学習や福祉の職場体験事業、実習生の受け入れを積極的に行っているが、今年は体験学習等が中止になってしまい、感染症対策を取った上で実習生の受入れを2名行った。		
4	（3）	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	同じ法人のグループホームと合同で2ヶ月に1回開催している。議題に合わせた地域の方をお呼びし、防災や事故、店舗のサービス等様々な意見交換を行い、サービスの向上に活かしている。今年も感染症対策を取った上で開催した。	同じ法人のグループホームと合同で2ヶ月に1回、偶数月に、新型コロナ禍の中ではあるが毎回委員が参集し実施されている。利用者（新型コロナ感染対策のため不参加）、家族、民生委員、地域住民代表、市役所職員等のメンバーに加えその時々のテーマに応じて警察署員、消防署員、近隣店舗従業者等にも参加していただき活発に意見交換し、実例が参考になることから充実した内容となっている。会議に参加した方が更なる協力者となりホームのサービス向上にも活かされている。	

自己	外部	項目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市の介護相談員が2、3ヶ月に一度来訪し交流を図っているが、今年はコロナの影響で受け入れは一度だけであった。認定調査の際は市の担当者へ利用者の暮らしぶりを伝え、連携を図っている。	認定更新調査時には市調査員に利用者の様子を伝え連携を図っている。新型コロナ禍の中、利用者の居室に直接入れるよう感染対策がなされている。市の歯科衛生士とも連携して歯科検診を申し込み治療方針を決めるなど、利用者の口腔ケアの相談窓口になっていただいている。介護相談員の定期的な来訪は現在中断しているが、情報交換できる良い機会でもあることから再開を待ち望んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	入居後、帰宅願望の強い利用者に、家族の許可を得て日中玄関の施錠をした事もあったが、現在は日中は玄関の鍵はかけておらず利用者が自由に行き来できるようにしている。屋外に出て気分転換を図ったりされている。身体拘束に繋がらない様に利用者の気持ちを大切にしたケアができているか、フロア会議や日々のミーティングの際に話し合ったり、勉強する機会を作っている。3ヶ月に一度、身体拘束委員会を開催し、勉強会も行っている。	日中、玄関は開錠している。入居間もない方で帰宅願望の強い方がおり、家族了解の下施錠を行ったこともあったが現在は落ち着かれている。外に出たいという方には職員が一緒に寄り添い散歩したり、屋外に出て気分転換を図ったりしている。退院後間もない方で一時的にセンサーを使用したことがあるが、現在、センサー等の使用はない。3ヶ月に1回、法人の全体会議で身体拘束適正委員会が行われ、その内容はフロア会議で伝えられ、ホームのミーティングや勉強会で話し合ったり学び、拘束のないケアを行っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	職員研修にて高齢者虐待防止関連法について勉強会を行っている。虐待に繋がるようなケアが行われていないかフロア会議等で検討したり、毎年ストレスチェックを受け職員の疲労やストレスが利用者のケアに影響が及ばない様にしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員研修にて権利擁護に関する勉強会を行っている。成年後見制度のチラシを玄関に置き、家族等に情報提供しているが、活用できていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、利用料金やグループホームでの生活や看取り、医療連携体制等、時間を取って詳しく説明し、家族の不安や疑問等に応じながら同意を得る様にしている。介護報酬の改定や物価などの変動により利用料が増加する場合は、納得を得られる様に説明を行っている。		

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	（6）	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の訪問時には、現状報告をするとともにささいな事や気になる事がないか思いを聞くよう職員から働き掛け、何でも言ってもらえる環境作りに努めている。遠方の家族にもホーム便りをお送りし日頃の様子等お伝えするようにしている。運営推進会議に家族も参加していただき、自由に意見や思いを伝えられる機会を作っている。昨年度は、家族アンケートを実施し意見や要望を聞いた。	殆どの利用者は自分の要望や意見を表すことができる。上手く伝えられない時は表情や今までのかかわりの中から受け止めるようにしている。コーヒー、お茶など写真を見て選択していただくなど工夫している。新型コロナ禍の中でも、家族との面会は窓越しや玄関で短時間行われている。利用者の様子は毎月の「こまくさ便り」や3ヶ月毎に出す「宮の前」、日常の写真などを家族の来訪時に渡したり郵送しこまめに伝えている。定例の家族会はないが日頃から何でも言っていただける関係づくりをしており、家族へのアンケートも行いサービス向上に活かしている。	
11	（7）	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回のフロア会議には理事長も参加し、意見や要望、ケアの方向性等について話し合っている。職員の気付きやアイデアを会議やミーティングの場などで聞くようにし、日頃から職員間で話し合い、ケアに活かしている。	フロア会議は理事長も出席し、月1回、全職員の出席で開かれている。利用者の状況やケアプランの検討、業務内容について活発に意見交換している。職員からの意見や要望を取り入れたり、理事長からのアドバイスがあったりと、検討した内容が運営に活かされている。職員は自己評価を行いスキルアップに繋げている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者も現場に来て、利用者と過ごしたり個別に職員の業務や悩みを把握する様に努めている。年1回自己評価を行い、職員が向上心を持って働けるよう働きかけている。また、職員の資格取得に向けた支援を行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修の情報を収集し、なるべく多くの職員が受講できるようにしている。また、参加した研修報告は法人リーダー会議で伝達講習し、研修報告書を全職員が閲覧できるようにしている。コロナ禍の為、オンラインでの研修が多かったが、参加する研修も増えてきた。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	研修や事例検討などを通して他事業者との交流を持ち、質の向上に励んでいる。同法人のグループホーム同士でもリーダー会議や運営推進会議を通して情報交換を行っている。グループホーム間で仕事のお手伝いなどを行い交流や連携を図ったり、暑気払いなどの行事には他部署と力を合わせ実行した。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前に利用者家族と面談を行い、本人の心身の状態や生活環境を把握するように努めている。コロナ禍のため、本人には事前にホームで過ごして頂く事は出来なかったが、事前にお会いして話を聞く機会を設けた。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族には入居前にホームの様子を見て頂き、入居後グループホームとしてどのような対応ができるのか、生活やサービスについて事前に話し合いをしている。また、これまでの家族の苦労や不安などをゆっくり聞き、信頼関係を作っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービス利用の相談時、本人や家族の思いや状況をよく聞き、面談を重ねる中で信頼関係を築きながら、グループホームとしてどのような支援ができるか考え提案している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員と利用者は一緒に暮らす仲間として喜びや楽しみ、不安や哀しみ、こだわりなどを共有し支え合える関係づくりに努めている。また、野菜の収穫や季節の行事に一緒に取り組んだり、干し柿、裁縫、漬け物作りなど教えて頂く機会が多い。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の日頃の状態をこまめに報告、相談し支援の方法について共に考えている。コロナ禍のため、抗原検査を実施し感染症対策をした上で短時間面会も行うようにしている。コロナの影響で誕生日会への家族の参加は見合わせたが、後日写真を渡し報告を行った。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	感染症対策を十分行いながら、スーパーへの外出を支援したり教会の方との取り継ぎの支援を行っている。週1回パン屋さんの来訪もある。また、年賀状を書く支援をしている。	新型コロナ禍の中でも感染対策を行い馴染みの方との関係が継続できるよう支援している。友人や知人、親戚等の来訪もあり、かかりつけ医の受診も行っている。行きつけのスーパーへ出かけたり、週1回地域のパン屋さんの来訪があり利用者は楽しみながら購入している。また、馴染みの訪問理美容を全員利用して髪を整えている。年賀状は書ける方、シールや判を押す方等、利用者に合わせ作成し家族や友人に出している。ホーム便りを遠方のお孫さんにも送るなどの支援に努めている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個別に話を聞いたり、皆で楽しく過ごせる場面作りや一人ひとりが役割を持った活動を通して、利用者同士で助け合い、関係がうまくいくように職員が調整役となって支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後であっても相談していただける関係づくりに努めている。古布やフキ、梅、農作物、日用品などを頂いている。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	（9）	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の関わりの中で、表情や言動などから本人の想いや希望、意向を汲み取る様に努めている。利用者の言葉、表情など介護記録に残すようにし、職員間で共有できる様にしている。把握が困難な場合は家族や利用していた事業所から情報を得て、本人本位の視点に立って検討している。	日々の関わりの中で言葉や表情などから利用者の意向を把握するようにしている。職員が利用者の力量に合わせお手伝いをお願いすると「やります」との返答をいただきいきいきと動かれる方がいる。また、飲み物についても「何でもいいです」と言われる方が多く、職員は好みの飲み物などをお出ししている。利用者と職員が1対1で会話する機会を大切にし、夜起きて来て話をされる時は飲みものを出しじっくり話を聴くようにしている。利用者一人ひとりの情報は介護記録に残し、フロア会議やミーティングで話し合い共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	プライバシーに配慮しつつ、利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、個性や価値観、サービス利用の経過等を本人、家族から話をお聞きし、情報を得るようにしている。また他事業所利用時の様子などを教えてもらえるよう連携を図っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の記録から利用者一人ひとりの生活リズムの把握に努めている。日々の支援から一人ひとりの今出来る事に注目し、一人ひとりの有する力の把握に努めている。		
26	（10）	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族との関わりの中での気づき、意見、要望などを反映した本人主体の介護計画にしている。フロア会議や日々のミーティングなどでモニタリング、カンファレンスを行い、本人、家族の要望や変化に応じて臨機応変に見直しを行っている。	職員は1～2名の利用者を担当しており、フロア会議で利用者の状況を報告し、全員で検討後、担当者とケアマネージャーで話し合い介護計画を立てている。会議やミーティングでモニタリング及びカンファレンスを行い、本人や家族の要望も計画に反映させている。介護計画は3ヶ月に1回見直し、状況に変化が見られた時には随時見直し変更している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	出勤時、申し送りノートや個人記録を確認し情報を共有している。個別のファイルを用意し、食事、水分、排泄等身体的状況及び日々の暮らしの様子や本人の言葉、エピソード等を記録し、介護計画の作成や見直しに活かしている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人、家族の状況に応じて通院の付き添いや送迎、個別的な買い物の支援など柔軟に対応している。入院した場合、本人、家族の状況に応じて退院のための話し合いや協力を医療機関と行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	利用者が地域で安心して生活できるよう警察、消防、薬局、教育機関、介護ショップ、消防防火設備会社、民生委員、地域住民等に運営推進会議に出席して頂き、意見交換、協力関係を築いている。本人や家族の希望に応じ、訪問理美容サービスも利用している。コロナ禍のため、ボランティアの受け入れはなく、地域の行事は中止となっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	総合診療医、婦人科医、整形外科医等、本人、家族の希望するかかりつけ医となっている。受診は希望に応じて家族付き添い、職員同行など柔軟に対応している。いつでも法人内クリニックに相談できる関係となっている。	入居時、希望を聞き内科については法人のクリニックに変更される方が多く、現在、全利用者を診て頂いている。内科以外の病院を受診する時は家族が付き添い、ホームから利用者の情報を提供し適切な医療を受けられるよう支援している。法人のクリニックで受診される時は他の患者の少ない時間に職員が付き添い受診している。法人内のクリニックの看護師が週2回来訪し、健康チェックや相談に応じており、24時間相談できる体制となっている。歯科医による訪問診療も受けている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日常の関わりや、チェック表の把握などで、体調や些細な表情変化を見逃さない様に努めている。変化等で気付いた事があれば定期的に訪ねて来てくれている看護師に報告し、適切な医療に繋げている。また、24時間いつでも相談できる体制になっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	2名の方が入院されたが、その際本人の情報等の提供を医療機関に行った。職員がお見舞いに行っている。また本人、家族、病院関係者と回復状況等、意見交換しながら、速やかな退院支援に結びつけた。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	早い段階から医師と家族の面談の機会を設けている。前回より3名の方の看取りを経験したが、その間にスタッフが大きく変わり、再度終末期ケアの見直しをしていく必要があると感じている。フロア会議等で話し合う場を設け、最期の時をより良く過ごして頂ける様、本人、家族の意向を伺い、医師、看護師、介護員の連携を図りたい。コロナ禍だったが、感染対策を行った上で最期の時を2名の方が家族と一緒に過ごす事が出来た。	入居時重度化した場合や終末期のあり方について事前指示書を頂き意向を確認している。終末期を迎えた時には医療の希望があるかを確認し、医師、看護師、職員がチームとして話し合いを深め対応している。開設以来22名の看取りを行い、ここ2年で8名の方の看取りを行っている。新型コロナ禍の中、家族が居室の窓側から入り本人と最期の時間を過ごしたこともあったという。一人ひとりの終末期ケアには違いがあり、やり直しがきかないことから次のケアに経験を生かしていこうとしている。	

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	フロア会議やミーティング等で意見を出し合い、実際に起きた事故や予測される事、急変時の対応について話し合い、勉強をしている。フロア会議でガウンテクニックやゾーニングについて実際に行い、学んだ。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	南、北ユニットそれぞれが出火した場合を昼・夜間を想定して、合同で年4回避難訓練を行った。うち1回は、民生委員の方にも参加して頂き、消防署立ち合いで消火器による初期消化の訓練も行った。	年4回、利用者と共に避難訓練を行っている。南棟・北棟、両ユニット合同で出火場所や昼・夜を想定し、夜間想定では本部から応援も頂き実施している。そのうち1回は民生委員の方にも参加をいただき、玄関外に避難してきた利用者の見守りなどの協力をお願いし万が一に備えている。また、消防署の協力を得て初期消火訓練、避難経路の確認などを行い、全職員が避難誘導を確実に身につけられるよう訓練を重ねている。	
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	本人の気持ちを尊重しながら、職員は人生の先輩として尊敬する姿勢を持ち接している。さりげないケアを心掛け、慣れ合いのケアにならない様気を付け、自己決定しやすい声掛けをするように努力している。利用者の尊重やプライバシー保護の大切さをフロア会議や研修で確認し合っている。	利用者に対しては、年長者として敬意を払い接している。言葉遣いには特に注意を払い、慣れ合いの言葉、声のトーン、不適切な言葉等、職員間で注意し合い、フロア会議でも不適切ケアについて勉強会を行っている。日々のケアの中では本人の気持ちを大切に考え、さりげないケアや言葉がけをしている。苗字に「さん」付けでお呼びしたり、以前の仕事柄「先生」とお呼びする方もいる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	個々の方の状態に合わせ声掛けし、できるだけご自身で決定できる様な支援をしている。表現が困難な方に対しては、行動や表情などからご本人の思いや希望を推察し支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な一日の流れは持っているが、個々の方のペースを大切に時々の気持ちを尊重し、その人らしく生活が出来るよう支援している。本人の言語化されない思いを読み取り、休息場面を作るなど柔軟な対応に努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	着替える際は、本人がお好きな服（もの）を選んで頂いている。帽子なども気に入ったものを選んで頂いている。意思表示や自己決定のしにくい方には職員が一緒に考え、本人の気持ちに寄り添った支援を心掛けている。		

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の準備や片付けを役割として職員と一緒に行って頂いている。誕生日会では、本人の希望のメニューを調理しお祝いしている。両ユニットで季節ごと行事を開催し、食事やおやつを楽しむ機会も作っている。	食事については全介助の方と一部介助の方がそれぞれ若干名ずつで、その他の方はお箸を使い自力で摂取できている。食形態はソフト食、ブレンダーにかける方が数名いる。メニューは法人本部の栄養士が立て、昼・夕食の主菜は本部で調理されている。昼・夕食時のご飯、汁物と朝食はホームで調理している。具材を切ったり、盛り付けたり、片付けたり等、殆どの利用者が役割としてお手伝いができ、職員と一緒に行っている。両ユニット合同で庭先で焼肉会をしたり、季節の行事食やおやつを作り、楽しい食事に繋げている。誕生日には特別メニューで利用者の希望の料理を作り手作りケーキでお祝いしている。ホームの畑で採れた野菜で食卓を彩り、焼き芋会なども行い、職員と一緒に会食を楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	チェック表を利用し、水分量、食事量の把握をしている。個別に高カロリー補食品を用意したり、食事形態をソフト食にするなど対応している。個々の食事量や好き嫌いに合わせ柔軟に対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	利用者一人ひとりに応じた対応を行っている。特に就寝前の口腔ケアは重要性を理解し、確実に行える様支援している。利用者によってはスポンジを使用し口腔ケアを行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄のサインや訴えを察知し、自尊心に配慮しながら支援している。排泄チェック表を活用し排泄パターンを把握し、尿意のない方でも時間を見計らって誘導をするなど、トイレでの排泄ができるよう支援をしている。本人の状態に合わせてパットの種類を考え、柔軟に対応できるようにしている。	排泄時、自立されている方が三分の一弱、一部介助の方が半数強、全介助の方が若干名となっている。布パンツを三分の一の方が使用している。可能な限りトイレで排泄できるよう支援しており、排泄チェック表を活用し、自分で行かれる方、トイレがわからずそわそわする方などその方に合わせたさりげない声がけやトイレ誘導をしている。メーカーのアドバイザーが来訪していたが、新型コロナ禍の現在、電話で相談し、また、試しながら利用者に合ったもの使用している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	繊維質の多い食材、乳製品などを取り入れたり、水分を多めに摂って頂いている。排便チェック表を活用し、看護師と連携しながら本人に合った便秘薬を処方して頂くなどの支援をしている。また、体を動かしたり、腹部のマッサージを行い腸の動きを良くする事で自然排便につながるよう支援している。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	これまでの生活習慣や希望に合わせて入浴できるよう、湯量や温度、時間帯など個々に合わせたケアを心掛けている。入浴に消極的な利用者の方も、週2回は入浴して頂ける様声掛けの仕方などを工夫している。好みの入浴剤を選んで頂いたり、季節の菖蒲湯やゆず湯を楽しんで頂く様にしている。	入浴時、自立している方は若干名で、全介助の方が数名おりその内二人介助で対応している方もおり、三分の二の方が一部介助となっている。基本的に週2回の入浴としており、本人希望で毎日入られる方もいる。季節の菖蒲湯やゆず湯を行い、入浴剤も使用し、楽しんで入っていただけるようにしている。入浴を拒む方には日を変え、体重測定にお誘いするなど、声がけを工夫し入れるようにしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	午前中リハビリ体操をし、午後近くの公園、施設の周辺を散歩したりして生活のリズムを整え、夜間の安眠につながる様心掛けている。眠れない方には会話をしたりホールでゆっくり過ごして頂いたり、温かい飲み物をお出ししたりしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個別に服薬ファイルを作成し、全職員が把握できる様にしている。服薬は個別に対応し、薬のセッティング時、準備時、配薬時と複数回確認している。服薬時も薬と本人の確認を行い、飲み込むまで確認している。処方の変更や追加があった場合は申し送りノートや個人記録に記録し、ミーティングで確認している。フロア会議などで薬に対する理解を深めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物干し、洗濯物たたみ、食器洗い、お椀拭き、おやつ作り、食事の盛り付け、新聞たたみ、雑巾縫い、花の苗植え、塗り絵など、得意な事や利用者の経験や知恵を発揮できる場面を多くつくり、その都度感謝の言葉を伝えるようにしている。誕生日会は利用者と相談しながら計画している。楽しみながら日々過ごせる様支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	施設の周囲や近所の公園への散歩は午後の日課になっている。感染対策をし、近所のスーパーへの外出も行っている。花見、バラ園見学、ぶどう狩り、紅葉狩りへも出掛け、四季を楽しんで頂ける様にしている。	外出時、自力歩行の方と車椅子使用の方が三分の一弱ずつで、他の方は歩行器やシルバーカーを使っている。天気の良い日にはホーム周辺や近くの公園まで散歩することが日課となっている。新型コロナ禍でも感染対策をし、近所のスーパーや薬局に買い物に出かけている。季節の行事のお花見、バラ・アジサイ見学、ぶどう狩り、紅葉狩り等、積極的に外出し四季を楽しまれている。外出できない時はウッドデッキに出て外気浴をしている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人で財布を持ち管理をしている利用者もおられる。施設でお金を管理している方には、支払いを代行している事を伝える事で安心感を得られるようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族と話したいという利用者には電話を取り次いだり、家族からの電話にもプライバシーに配慮しながらゆっくりとお話頂いている。家族から手紙が届いたりしている。また、職員と一緒に年賀状を出したりしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者にとって馴染みの物、生活感や季節感のある物を配置し、家庭的な雰囲気作りに努めている。刺し子や絵、塗り絵など利用者の作品を飾ったり、季節に合った花を飾るなどして、居心地の良い雰囲気作りに努めている。	玄関には紫陽花の絵が飾られ花が生けられており、リビング、キッチンは広々として利用者が料理をしやすい低めの調理台となっている。食事後はリビングのソファーで利用者同士談笑されたり、雑巾を縫ったり、テレビを観たりと思い思いの時間を過ごしている。一段高くなった和室には炬燵が置かれ、日当たりも良く、腰かけて日向ぼっこをされる方もいる。ウッドデッキへも自由に出入りすることができ季節を感じることができる。床暖房が入っており温かく過ごせている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングにはソファー、畳スペースにはこたつがあり、気の合った利用者同士座って話が出来たり、気軽に休んで頂ける場所となっている。ウッドデッキにも椅子を用意し、外気に触れながら景色を眺め、日向ぼっこなど楽しんで頂けるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みの家具や仏壇、テレビ、寝具など好みの物を自由に持ち込んで頂いている。家族の写真や利用者が作った作品を飾ったりして、利用者一人ひとりの居心地の良い空間となるよう努めている。	居室には洗面台、エアコン、ベット、収納ダンスが備え付けられ、北側の居室は床暖となっている。馴染みの家具や仏壇、ハンガーラック、テレビなどが置かれ、家族の写真や利用者自らの作品が飾られている。整理整頓された居室で、心地よく思い思いの生活を送っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の身体状況に合わせ、トイレ表示やL字バーの使用、コールボタンのひもを長くしたりなど、安全に安心して暮らせる様環境整備に努めている。表札にて自分の部屋がわかりやすい様配慮している。車椅子、歩行器などの接触事故のない様、リビングのテーブル配置、置き場所にも気を配り安全に心掛けている。		